



収穫した地元品種の桃を試食するNGO「桃の壁」の試食会

パリと近郊の都市農業

くそのさまざまなかたち

羽生のり子 文・写真

フランスで都市農業が始まったのは19世紀後半、戦争や不況で都市住民が飢えるのを防ぐためだった。産業革命で都市に労働者が溢れるようになって、労働者の住区に労働者菜園や家庭菜園ができたのもこの頃だ。

都市農園の概念とその目的が変わってきたのは、21世紀になってからだ。地球温暖化を防ぐために炭素排出を減らし、生物多様性を保持することが重要な課題になった。また、気候変動の影響で干ばつや天候不良が頻繁に起こる中、食料の確保も重視されるようになった。

都市農業の目的には、①緑地増加で炭素排出を減らす、②生物多様性を保つ、③住民に新鮮で安全な食べ物を供給する、④家庭の野菜クズなどを堆

肥にして使うことでゴミの量を減らす、⑤農作物の輸送エネルギーと包装を節約する、⑥雇用を作り出す、などがある。

率先して都市農業を推進してきたのはパリ市だ。「パリ」と農業者を意味する「アグリキュルテール」をかけた「パリキュルテール」という言葉を作り、2017年から都市農業のプロジェクトを募集している。入賞した優秀なプロジェクトには、実現のためにパリ市から支援が得られる。

国も2020年から都市農業を環境戦略の重要な要素として位置づけ、450の地区で都市農業を支援するようになった。

ここでは、パリ市や国から支援を受けた計画も含め、パリとその近郊に存

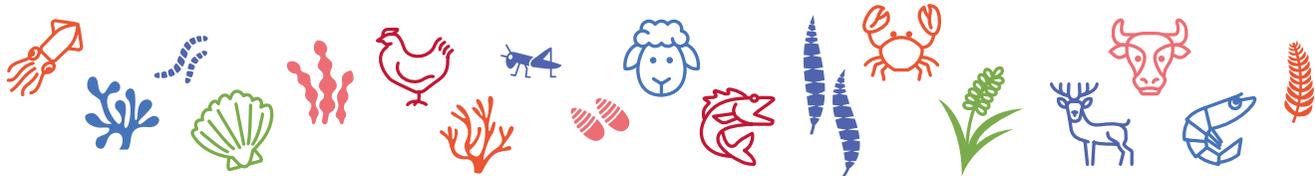
在するさまざまな都市農業の形を紹介する。

既存の農地を守るNGO「桃の壁」

パリの東の郊外のモントルイユ市に、文化遺産に指定された「桃の壁」がある。16世紀に、この地で桃の木を壁に沿って植える独特の栽培方法が始まった。昼間に壁に蓄えられた太陽熱が夜間の寒さや霜から果樹を守り、果実の成長を促すのだった。こうして育った桃は、仏王室や英王室の食卓で珍重される特産品となった。ところが19世紀後半に鉄道の発達で南仏の果物が流通するようになり、モントルイユの桃栽培は衰えた。それに加えて郊外の人口

羽生のり子
(はにゅうのりこ)

フリーランスジャーナリスト
海外書き人クラブ会員
[専門分野] 農業、環境問題、エコロジー、食、美術、フランス社会
[著書] 『シリーズ田園回帰8 世界の田園回帰』『よくわかる 国連「家族農業の10年」と「小農の権利宣言」』『新型コロナ19氏の意見』(全て共著)



増加で宅地化が進み、町中に回らされていた壁は取り壊されていった。1980年代、危機感を抱いた市民たちが残った壁を保存しようとNGO「桃の壁」を設立し、昔ながらの方法で桃などの果樹栽培を始めた。会員は50人で、その他の植物も栽培し、壁を修復する。会員になると、共同作業のほか、割り当てられた畳1畳半ほどの小さな畑で好きなものを栽培できる。筆者も会員で、花作りを始めた。

問題は、露地栽培ができる作物が限られていることだ。桃栽培が盛んだった頃にパリから肥料にするために運んだ汚泥に重金属などの汚染物質が含まれていた。それが今も土壌を汚染している。葉や根を食用にする植物は汚染の影響を受けるので、作ることができない。そのため、食用作物の栽培にはボックス形のプランターを使う。果物は汚染の影響をほとんど受けず、食べても問題がないと言われている。筆者もNGOの仲間も、

どの自治体でも食用作物の露地栽培が難しい。露地栽培が可能なのは、市や県の公的援助を得て全区画の土壌を分析し、問題のない場所を特定した場合だけだ。

自治体で作った温室の野菜団地「シテ・マレシエール」

もNGOの仲間も、せっかく土地があるのに直接植えられないこととの歯痒さを感じている。パリとその近郊には、工場跡地が多く、フィルムや布などの製造に使っていた重金属や有機溶剤などの有毒物質が工場閉鎖後も土壌に残っている。農業汚染と工業汚染の両方で、モントルイユに限らず、パリ近郊では

モントルイユの隣町、人口3万人のロマンヴィル市に2021年、4階建てと7階建てのガラス張りの温室ができた(写真1)。回廊でつながる二つの建物は、「シテ・マレシエール(野菜団地)」と命名された、再開発地区にできた市営設備で、700平方メートルのスペースにボックス753個を置いて、ハーブ、野菜、果物を暖房なしで温室栽培している。10月になってトマトやナスがたくさん実っていた。地下では120平方メートルのスペースにキノコを栽培している。20人のスタッフのうち15人は失業者で、職場復帰への一歩として雇われている。一階には栽培した作物を使ったレストランがある。料理教室など、学童と市民のためのワーク



写真1 シテ・マレシエールの外観



写真3：空中栽培されている花



写真2：つるで伸びる野菜は水耕栽培。土台にはココナツの繊維が使われている

ショップも開催される。栽培するのは職員で、市民は採れた作物を毎週水曜日夕方に買うことができる。パリ郊外にある欧州最大の食品卸市場、ランジス市場の価格が基本で、この値段を払うのはロマンヴェル非在住者だ。市の住民は、家族の状況によって割引率が25%、50%、75%と異なる。買いに来る前に、市役所でどの分類に入るかの証明を出してもらおう。学生と生活保護受給者は75%引きだ。誰もが地元産の野菜を買うことができることが割引の目的だ。都市農業の目的である社会的、教育的、エコロジック的、経済的な要素を全て満たした見事な例だ。

ハイテク農業で

欧州最大の屋上栽培

パリのポルト・ド・ベルサイユにある「パリ・エキスポ会場」の6号館の屋上で、2020年に大掛かりな屋上栽培が始まった。4500平方メートルから始まった栽培面積は2022年には1万4000平方メートルになり、欧州最大規模となった。栽培期間

は5月から10月までの半年間。毎日200〜300キログラムの作物を収穫して付近のホテルやレストランに卸し、一般向けには近くのスーパーで販売する。

運営するのは、農業技術のスタートアップ「アグリポリス」と屋上栽培の会社「キュルチュール・アン・ヴィル」(街中の文化・農業)がこの場所のために共同で設立した企業「ナチュール・ユルベヌ(都市の自然)」である。農法は、ココナツの繊維を土台にした水耕栽培と、支柱のポケットに植物を入れ、根に培養液のミストを噴霧するエアロポニク(空中栽培)だ。どちらも土を使わないので、病原菌がつかない。パリの空気は汚れているが、ミストを噴霧することで大気汚染物質の99パーセントが落ちるといふ。

水耕栽培でつるになって伸びるナス、トマト、ピーマンなどを(写真2)、空中栽培でサラダ菜などの葉物、イチゴ、ハーブを栽培する。空中栽培では、アブラムシを引き寄せて作物の方に行かせないためと、ミツバチなどの受粉を助ける動物のために、花も植えてい

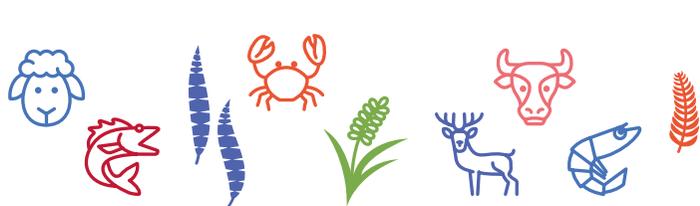
る(写真3)。栽培するのは同社の社員だ。栽培したい市民には、1平方メートルのボックス形プランターを年間契約で貸し出す。栽培方法は農園の社員が指導し、週に2回アドバイスを受けられる。1ボックス330ユーロ(約4万9000円)と高価だが、156個のボックスがすぐに予約で埋まった。

ユネスコの職員農園

パリのユネスコ本部を訪れた時、庭の一角が農園になっていることに気づいた。1・25平方メートルのボックスが並び、トマトやカボチャが実っている。職員の農園で、「ノーシテイ」という、企業の社員農園やベランダ菜園を運営するスタートアップが運営している。同社の話では、パリ市はパリ中で農業ができる空き地を探しており、ユネスコの敷地内に2000平方メートルの空き地があるのを見て都市農業を提案したという。ユネスコはこれに合意し、2019年に農園計画の入札を募集した。落札したのがノーシテイだった。この農園計画は、前述のパリ市の「パリ



写真4：大通りに面したユネスコの農園。ボックス栽培し、移動可能



キュルテール」で入賞し、パリ市の支援を得て実現した。

ユネスコが出した条件は、「畑が移動可能なこと」だった。予定地の地下に会議室があるため、水漏れがあつては困るからだ。ノースティの技術では、上から水をやるのではなく、ボックスの底にある天然石が水に触れて根から植物に水が行き渡るため、ボックスから水が漏れる心配はないという(写真4)。

ユネスコ職員は農作業をせず、ノースティから農園係が来て種まきから収穫まで行う。収穫物は年間購入した40人の職員に月2回配布する。中身は選ぶことはできない。ユネスコには200人からなる農園チームがあり、種まきワークショップなどの農園情報をボランティアで全職員に出している。

ヘンリー・ムーアの彫刻など著名な現代美術家の作品が置かれ、背景にはエッフェル塔が見える堂々たるユネスコの庭の一角を、無造作にカボチャが転がっている農園にしたことで、人間の営みを感じられるホッとする空間になったように思う(写真5)。害虫の問

題はないが、鳩がキャベツが大好物で、葉を食べてしまうのが問題だという。

フランスの都市農業は無農薬

フランスの都市農業では農薬を使うのか、気になった読者もいると思う。ここで紹介した4つの例では農薬も化学肥料も使わない。有機

農業と呼びたいところだが、水耕栽培や空中栽培、ボックス栽培は直接土に植えるのではないので、有機農業の名称を使うことも、作物に有機認証を得ることもできない。しかし、市民は、認証がなくても環境に配慮した農業であることはわかっている。

フランスでは2017年から公共の土地(国や自治体の所有地)では農薬を使用禁止にする法律ができた。また2019年からはアマチュア園芸家も家庭菜園などで農薬を使

うことができなくなった。農薬を使用できるのは実質的にプロの農家だけである。

都市農業には、生物多様性を豊かにする目的もある。そのため「都市農業＝無農薬・無化学肥料」であるのはフランス人にとって当然と捉えられているようだ。



写真5：カボチャがなったユネスコの農園。背景にエッフェル塔が見える。球形のオブジェは現代美術作品